

(6/24 7刊 (面))

育児の悩み 夜聞きます

子どもをあやしながらスタッフと談笑する母親(右)
ドリーム子育て支援センター提供

人目気にせず本音「ワンオペ」層も

機関につなぐことができ
長補佐も「家庭内で問題を抱えているようであれば、いち早くキャッチし、専門

「昨日も夜泣きで主人が起きてしまって、悪いことしたなど。今日はもう少し子どもを遊ばせようと思って連れて来ました」。松戸市の「ドリーム子育て支援センター」で母親が打ち明けた。社会福祉士と保育士の資格を持つスタッフはほほ笑みながら何度もうなずき、すぐにアドバイスを返すことにはせず、じっくりと耳を傾けた。

センターは子ども連れで利用でき、社会福祉法人「さわらび福祉会」(和田泰彦理事長)が委託を受けて運営している。同法人は夜間

保育所も開設しており、子どもを迎えて来た保護者が保育士に仕事や生活の悩みなどを打ち明けることもしばしば。夜の相談需要もあらうだとか、同市にセンターの開所時間延長を働きかけ、午後5時~10時の対応が始まつた。

4月の利用は12組で、想定以上に多かったのは専業主婦。「夜泣きに付き合うと日中は体がだるく、夕方に来た」「子どもがなかなか寝付かないで連れてきた」「子どもの発達に不安な面があり、日中は他人の目が気になる」。家事と

支援センター 共働き向け

日中は仕事に追われ、子どもの成長が気になっても相談する時間もない——。そんな共働き世帯を支えようと、千葉県松戸市の子育て支援センターが4月、夕方から夜間の相談を始めたところ、日中に働く親のみならず、夫の帰宅まで「ワンオペ」で育児を専業主婦のニーズも掘り起こした。全国的に珍しい取り組みで、関西や九州の自治体や保育施設からも問い合わせが寄せられている。

【谷本仁美】

新毎日
夕刊
6月24日(月)
2019年(令和元年)

発行所: 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
〒100-8051 電話(03)3212-0321
毎日新聞東京本社

チェック

育児を一人でこなし、夫の帰りを待つ夜は疲労からライラが子どもに向いて「まいがちな『魔の時間』(新田理事長)。滞在時間は約1時間と短いが、子どもを遊ばせながら、スタッフにつらい気持ちを聞いてもらうことで、安心した表情を見せる人も多いという。「父も手を上げていた」という切実な声もあった。

5月は利用者が24組に増し、父親を含め本来ターゲットとしていた共働き世帯の親の姿も増えてきていた。親の姿も増えてきてほしい」。近年の児童虐待の増加も踏まえ、同子育て支援課の大場慶也課長補佐も「家庭内で問題を抱えているようであれば、いち早くキャッチし、専門

相談スタッフでもある吉間保育所の三浦理恵園長は

「日中に比べ、夜の方が深く話ができる。一人で抱き込まず、気軽に気分転換してほしい」。近年の児童

虐待の増加も踏まえ、同子育て支援課の大場慶也課長補佐も「家庭内で問題を抱えているようであれば、いち早くキャッチし、専門